

北海道子どもセンター 年次総会 記念講演 2013

子ども・若者と大人の生きづらさの折り重なるなかで存在を受けとめ合える場を生み出すために——焦りと先回りの子育て・教育を超えて

2013/12/15 富田充保（札幌学院大学）

〔はじめに〕

- ・ 2009年の別の講演の時には、子ども・若者の生きづらさを、特に自己肯定感・自尊感情の低さの問題に焦点をあてながら、彼ら/彼女らの人間関係の世界にそくして考えてみた
- ・ 今回は、テーマにもあるように大人の側、とくに若い親たちの子育てをめぐる葛藤・悩みのなかで、どのような生きづらさを抱え込んでいるかを、切り口にしたい。
- ・ 同時に、子ども・若者の生きづらさを、特に情報消費社会のいつそうの進展のなかでの彼ら/彼女らの人間関係の世界にそくして考えてみたい。
- ・ そのさい、親たちの生きづらさと子ども若者たちの生きづらさが、どこかで共通点もっていることに触れることになるだろう。「他者からの肯定・承認の困難と切実さ」と「それを生み出す協同的な世界」の足元からの再建・創造に触れることになると思う

〔1. 親たちが抱え込む生きづらさ——ある「子育て広場」における若い母親たちの子育てをめぐる姿から〕

- ・ <ひと時子どもから離れたい—— 保育者にお預けの子育て広場>
- ・ <寄せられる子育てにおける悩みや切実なニーズ>
- ・ <ついで出てくる指示・命令・禁止の言葉かけ>
- ・ <問題が起きないこと・起こさない子どもが一番!?——子育ては自分が評価対象になる・焦りと先回りの子育て?>ex. 「いじめをしない子・されない子にする子育て?」
- ・ <ともに子育てを担おうとする異世代のなかで期待される経験——多様で広がりのある世界のなかで出番をもつ機会を広げる——学生（若者）と母親（大人）との相互肯定・社会的承認の切実さと自己肯定への一歩>

〔2. 再び子ども・若者の生きづらさを考える〕

そうした母親の生きづらさと重ねあわせながら、子ども・若者の生きづらさを再び考察。

主に以下の3つの複合的な要因の重なりによると考えている

- 〔①. 「既読なのに返信しないのは犯罪です!?!」——張り巡らされる情報消費手段の縛り

「ちょっとした失敗や誤りを許されない・許せない」

⇒ いい子で満点の時だけ愛される・安心できる：条件付きの愛情だと見えている
みじめな自分・弱い自分・ダメな自分を見せることは許されない・許せない

↑

その背後に、大人たちの疲労と満たされない想い。先が見えない中せめて「わが子には同じ思いはさせたくない」という焦りと強迫が、再び新しい形で強まっている時代。今すぐここで手っとり早く成果と安心材料が欲しい。

←大人自身の雇用環境と労働形態の過酷さの強まり（正規雇用が減った分非正規雇用を増大させてきた政治・雇用政策）←山脇由貴子『モンスターペアレントの正体』中央法規、2008、p144.

↑

【3. 子ども・大人の生きづらさ＝焦りと先回りと強迫の背景】

こうした子ども・大人の生きづらさ＝焦りと先回りと強迫の背景には、社会全体を貫いて、「頑張れない」「皆とうまく同調できない」「能力に優れていない」人間であるのは「あなたの努力と選択の結果なのだよ」というささやきに困り込まれ、絶えず自分をチェックし続けることを強いる人間観が、社会で支配的になっていることが明らかになっていると考える（リスク社会における再帰的自己形成の強制とグローバル経済の下での多国籍企業の支配と政治における新自由主義の席卷＝社会の問題を個人の努力と選択という個人責任だけに還元してゆく支配の形）

↓

こうした中では、足下からできるところから、出発点として、まずは「あなたの存在そのものが大事」「そのままがいい」：無条件の肯定・承認への切実な願い（泣き叫び）は、子どもも大人も同じではないか

【4. 子育て・教育をめぐる課題に寄せて】

・今日の時代状況の中で、子育て・教育のスローガンを問い直す

「がんばってね」「皆仲良く」「コミュニケーション力・表現力を身につけないと」

⇒ 下手をすると「頑張っている」「同調性のある」「能力に優れた」人は尊重されるが、それ以外は切り捨て＝排除されるのだというメッセージになりかねない時代

・出発点として無条件で存在を肯定される＝貧困・格差化社会と情報消費社会の支配に抗する時空間を地域の各所に。

→ そして地縁・血縁というより問題縁・課題縁に子どもと大人を巻き込み、社会参加のなかで役割があり期待される社会的存在へ。多様なタテヨコナナメの関係に人々

——子ども・若者の関係世界の縛りの強度と情報・消費社会の相互依存・相互浸透]

- ・ 学食で一人でランチを取ることは、死ぬよりいやだ!! 孤立していることがあからさまになることへの恐怖、

EX. そのために大学に来ること自体をやめる!?

- ・ 不安定で流動的な人間関係を維持するための細心の努力。嘲笑や攻撃の対象にならないための予防的・防衛的な対処。 ← 『生活指導』誌の中学生の声
- ・ そうした状況をつなぎとめるアイテムとしての情報・商品（スマホ・LINE は必需品＝不安を基礎にした消費の強迫）の進展が、いっそう不安定で流動的な人間関係を生み出す皮肉。

← EX. 「LINE 疲れ」参加しつづけることが友人の証? 「どこ行った?」

← こうした努力にもかかわらず、ユニセフ幸福度調査（2007：孤独を感じる15歳）における日本の突出（29.8%）

⇒ しかし基本的な安心・安全感は得られないむなしさ。根本には今のままの自分であっていいと肯定される安心・安全な場所が狭まり、みじめな自分・弱い自分・ダメな自分を見せることは許されない・許せない関係世界になっていること。たわいもない会話を行う時空間が縮小していること。裏返せば「そのままの自分の他者からの肯定・承認の困難と切実さ」と子ども・若者の出入り自由な独自空間の再建の課題

→ 「EX. 教職有志 G・雑談会＝課題縁・問題縁でつながる相互的自助グループ」の意義。

[②. 「私はお母さんの重荷になっているんじゃない」「私はいつでも取り換え可能な存在」

—— 子ども世帯の貧困と若者の労働現場の流動化]

- ・ 子ども世帯の貧困率：7人に1人、14.9%（2012）←14.3%（2007）← 12.9%（1989）
自主的な進路・職業選択を行うための人生経験そのものの制限 ex.友達に誘われなくなる
標準的生活が享受できないことによる自己の尊厳・アイデンティティ形成に困難が

- ・ 非正規雇用・不安定雇用の拡大政策＋リーマンショック

⇒ 究極の使い捨て労働力（雨宮かりん他『生きづらさについて』光文社新書）

EX.日雇い派遣 ⇒ 今日だけ必要で明日はわからない・だめならいくらでも他の人がいる ⇒ いつでも取り換え可能な自分? かけがえのない存在ではないと日々尊厳が踏みにじられる。（就活ブルーの学生にも）

[③. 一番にならないと自分が保てない子ども?すぐ成果が出ないと安心できない親!?

—— 格差・序列化社会（勝ち組・負け組の内面化：子どもと大人の泣き叫び）]

- ・ 小学校の教育現場からの報告「完璧でないと自分を認められない」

が触れる協同の世界を広げる。 → 「いじめをしない子・されない子にする子育て」の発想を逆転させる。

⇒ そして次第に相互に認め合う「居場所に集う『私たち』という仲間意識に（相互承認）」「自分で自分を受けとめ肯定できる世界を（自己肯定）」

EX. 学校の日常的な実践のなかで想いを共有する（ex 太田一徹、千葉での避難高校生を支えた教師と自主的活動との出会いの場）・子育てサークル（ex 子ども広場）で・保育（卒所後も続く学童保育の上下関係・家族ぐるみの関係）で・大学の自助グループで・地域のNPOで

・貧困と不安定雇用の現実とそれに替わる社会の可能性を学校の中にも作り出す。「福祉と労働と教育の結節点としての学校像」を共有する。そのテーマを子どもと大人の「対話と学習」の課題に（cf 竹内常一・佐藤洋作編著『教育と福祉の出会いどころ』山吹書店、2012、pp241—249）。

⇒ 子どもは親の重荷ではなく、社会の未来の希望であることを現実にする

「取り柄のある強い個人のみで社会はつukれない」「普通に働いて報われる労働が保障される社会」を見通すためにも、子どもと一緒に大人が学ぶ。

← 「あなたの努力不足と選択のミス」で、こうなったのではない！！

自らの境遇を捉え返す社会認識を様々な機会に学習の課題に

EX. 大阪千代田高校の取り組み、みやぎ教育文化センターで話を聞きとる大人と社会的存在としての自分の芽を表現する高校生